



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学総合博物館ニュース
Author(s)	山本, 順司; 高口, 幸恵
Citation	北海道大学総合博物館ニュース, 37
Issue Date	2018-06-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/70941
Type	book
File Information	MuseumNews_37_web.pdf





CONTENTS

- 01 常設展示 「北大の学び舎」のリニューアル
- 02 ミュージアムショップ リニューアルオープン
- 04 新任教員紹介
- 06 夏季企画展示 「視ることを通して」
- 08 常設展示〈収蔵標本の世界〉「鉱物・岩石標本の世界」
- 09 卒論ポスター発表会
- 11 「札幌農学校第2農場を活用した
北海道遺産発信プロジェクト」の実施

常設展示

「北大の学び舎」のリニューアル

「北大の学び舎」は、人文・社会・自然科学を網羅する大学の全12学部を紹介するエリアです。各学部の展示スペースでは、それぞれの学部でどのような教育や研究が展開されているのか、そして卒業生がどのような進路を選択しているのかを紹介しています。また、各学部の一押し研究者の研究紹介や、プレスリリースなど学部の最新情報を示す掲示板も設置しています。本学で日々進められている教育・研究の最先端を紹介するために、2017年度冬季には薬学部、経済学部、法学部、教育学部の展示の一部をリニューアルしました。

●薬学部

一押し研究紹介を小川美香子教授の「薬学研究におけるイメージングの威力」に更新しました。イメージングとは見えないものを画像化してみえるようにする手法のことです。ガン細胞を死亡させるガン治療に役立つイメージング剤の開発研究に取り組んでいる小川先生。その研究の端緒では、ガンのある場所をみつけるために開発していたイメージング剤が次々にガン細胞を破裂させてしまうのを見てガッカリしたと言います。また「体に優しい生薬の便秘薬」、大黃の国内で樹立された初の栽培系統・北海大黃についての展示を追加しました。



●経済学部

経済学・経営学の系譜、およびノーベル経済学賞受賞者一覧のパネルを新たに作成しました。展示を見て、日本人初のノーベル経済学賞を目指す学生が一人でも増えることを期待しています。また、一押し研究を「ウズベキスタンの慣習経済」と題された樋渡雅人准教授の研究紹介に更新しました。慣習経済とは、人々が血縁・地縁などの社会的紐帯や慣行を介して相互に依存しあって生じる経済です。現地



での詳細な家計調査から、慣習経済にはリスク分散や所得再配分などの社会保障機能があると樋渡先生は説きます。

●法学部

法廷教室における模擬裁判のビデオ公開を始めました。法廷教室とは、法学部生が法曹になるために欠かせない実務技能をより実際の雰囲気に近い環境で身に着けるために設置されている本物の法廷を模した教室です。この展示のために法学部で行われた模擬裁判の授業を撮影し、編集しました。20分を越える映像は見ごたえ十分。日常生活ではなかなか体験できない、傍聴席に座った気分を味わってみてはいかがでしょうか？



●教育学部



身体測定と北大幼稚園の歴史に関する展示を新設しました。皆さんは座高を測定したことがあるでしょうか？1937年～2016年まで測定されていた座高は、もともとその体重との関係から栄養不良かどうかを判断するためのものだったとされます。一方、1952年に始まった北大幼稚園は中央ローンに置かれた古電車3台が最初の舞台でした。幼稚園や身体測定の歴史の展示は、社会環境の変化を考える契機になるものと思います。

「北大の学び舎」では、今後も本学で日々更新されている教育・研究の成果の波に残り残されないよう、展示を更新していく予定です。「北大の学び舎」の展示は関連する部局の教職員の方々のご協力を得てはじめて維持・発展できるものです。お忙しい最中にもかかわらず今回の展示リニューアルにご尽力いただいた皆様にこの場を借りて改めて厚く御礼申し上げます。

江田真毅
(研究部講師／動物考古学)

ミュージアムショップ リニューアルオープン

●2018年4月28日(土)



2018年4月28日(土)、来館者の憩いの場所として親しまれてきた「ミュージアムカフェ ぼらす」の兄弟店として「ミュージアムショップ ぼとろ」がオープンしました。

「ぼとろ」とは、シリウス星を支える小さな双子星です。

建物に足を踏み入れた瞬間、タイムスリップしたような非日常を来館者に与える一方、誰もが共感する懐かしさも演出するこの博物館をシリウスに見立て、それを支える星でありたいとの願いを込めて作り上げたお店です。

そしてその過程において、温かい目で見守り、様々お力添えくださった博物館担当の諸

先生をはじめ事務局の皆様には、この場をお借りし心から感謝申し上げます。

また、感謝の気持ちをお返しする意味でも、大学内ミュージアムショップとして「学生の学びの場」となるよう取り組んでまいります。

まずは、北大総合博物館の顔として既に展開する「学生企画商品」をメインとして、博物館オリジナル商品や店舗レイアウトについても学生の皆さんの意見も取り入れながら、それらがどう販売に結びついて行くのか、トータルの流れを知ること小売業を考えるきっかけとなれと思います。

そして「ぼとろ」もそんな学生の皆さんと一緒に

になって学び成長していくことで、その時代その時代のニーズにマッチした魅力あるショップとして、存在しつづけることができるのではと考えます。

余談となってしまいますが、実は私自身、車椅子を利用し生活をする身体障がい者であります。

あまり知られておりませんが、北大総合博物館は外観から受ける印象とは異なり、バリアフリー設備が充実する大学構内有数のスポットであり、例えばオストメイト機能や赤ちゃんのおむつ交換台を備える清潔な車椅子用トイレ、車椅子利用者用の段差解消機など、館内を安心して楽しめるよう、展示方法も含め、様々な工夫や設備も整いつつあります。

ぜひ多くの障がいを持つ方々にご来館いただき、また博物館の一日を楽しむ「障がいを持つ子供たちも対象としたキッズイベント」も、ショップとして手掛けていきたいです。

スタートしたばかりの「ぼとろ」ですが、「モノの販売を通じて、ヒトが繋がり、楽しいコトが生まれる場所」を基本コンセプトに、新しい発見と出会いを来館者の皆様に提供し続けるとともに、北海道大学総合博物館の一部として溶け込んでいけるよう、スタッフ一同尽力してまいります。

皆様のご来店、心よりお待ちしております。

いかい ましつぐ
猪飼嘉司
(ミュージアムショップ ぼとろ 店長)



小林快次准教授に北海道新聞文化賞



受賞した3名(左から方波見康雄氏、小林快次准教授、丸谷智保氏)

当館の小林快次准教授は、平成29年11月9日札幌グランドホテルにおいて、北海道新聞社より第71回北海道新聞文化賞が授与されました。この賞は、1947年以来北海道文化の振興に寄与した社会事業、学術、芸術、教育、



賞状を受け取る小林准教授

産業経済などで著しい業績のあった個人、団体等に贈られるもので、「社会」「学術」「経済」の三部門があり、過去の学術部門ではノーベル賞受賞者である鈴木章北海道大学名誉教授、社会部門では北島三郎氏、経済部門では株式会社ニトリなどが受賞しています。

小林准教授は「学術部門」として『「むかわ竜」の化石発掘など国内外の恐竜研究に貢献』というタイトルで受賞しました。「社会部門」では医療環境の改善に向け提言を続けている方波見康雄氏、「経済部門」では北海道内を中心にセイコーマートというコンビニを建て地域住民の生活を支えている株式会社セコマの丸谷智保社長が受賞しました。

小林准教授は、国内外の恐竜を調査・研究することによって、北海道大学を「日本恐竜研究の拠点」とすることに成功させました。主な研究内容は、恐竜進化の解明と恐竜の生活の復元ですが、近年通称「むかわ竜」の発掘に従事したことにより、学術面のみならず、北海道の魅力推進のためにも大きく貢献しました。「むかわ竜」は、むかわ町穂別から発見された本邦初的大型恐竜全身骨格です。本邦

史上最高の恐竜化石であり、その大きさは8メートルにも及ぶものです。このニュースは日本中の注目を集め、日本の恐竜研究の歴史に残る大発見となりました。この大発見は、むかわ町や北海道大学の協力によって達成されたものであり、そのおかげで北海道新聞文化賞受賞に至りました。

授賞式には、北海道大学の名和豊春総長や藤田正一名誉教授、北海道大学総合博物館の中川光弘館長、湯浅万紀子教授と大原昌宏教授が列席しました。また、むかわ町からは竹中喜之町長、長谷川孝雄教育長、むかわ竜の第一発見者である堀田良幸氏などに来ていただきました。また、北海道議会議員の神戸典臣氏や吉川隆雅氏、胆振総合振興局の本間研一局長にも参列していただきました。授賞式では、受賞した3者が一言ずつ感謝の意を述べた後、賞状と安田侃氏のデザインした像が贈呈されました。その後、懇親会が開催され、和やかな雰囲気のもと授賞式が行われました。

写真撮影：むかわ穂別博物館 西村智弘学芸員

新任教員紹介

●田城 文人（資料基礎研究系）



2018年4月に函館キャンパスにある分館施設の水産科学館に着任しました。農業系の家系で育った私ですが、物心ついた頃から最も身近な生き物で、さまざまな興味の対象になったのが魚類でした。そのような生い立ちもあってか、卒業研究から現在まで分類学に軸を置いた魚類の多様性解明を目的とした諸研究に取り組んでいます。分類学的研究では博

物館等に保管される標本が研究の材料になりますが、私は「足で稼ぐ」をモットーに掲げ、とにかくフィールドに出ることを大切にしてきました。フィールド調査は多くのひらめきと疑問をもたらし、新たな研究テーマを見つけ出す原動力にもなります。当館におきましてもこれまでの研究テーマを継続しつつ、地の利を利用して北海道を舞台にした新たな研究も進めていきたいと思っています。

私は学部から博士後期課程までを本学の水産学部・水産科学院で学び、研究では水産科学館関連施設と収蔵資料(魚類標本・写真)を利用しました。当時の標本保管施設である「水産生物標本館」は老朽化が目立ち、利用者にとっても、標本にとっても良い状況とは言えませんでした。一方、学生ボランティアとしてそこで学び、身につけた経験はその後の研究・博物館活動で大いに活かされました。水産生物標本館は2016年に建て替えられ、移動棚も導入されたことで安全で効率的な標本の維持・管理が可能になりました。北大とその後

中の研究・教育活動に利活用してもらうこと、良い状態で次世代に受け渡すことに努める所存です。なお、水産科学館は次の目標である、展示施設のリニューアルに向けて本格的に動き始めています。目標の達成に向けて、総合博物館と水産学部・水産科学研究院のスタッフ及び学生ボランティアの皆様にはさまざまな点でご協力いただく事になるかと思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。

田城文人
(研究部助教／魚類分類学)



2017年度

北大総合博物館活動報告会

●2018年3月19日



中川館長と
ボランティア表彰者

一年間の博物館活動のさまざまな局面を振り返る2017年度総合博物館活動報告会が、2018年3月19日(月) 13時30分から16時に「知の交流」ホールで開催されました。

中川光弘館長の挨拶に始まり、ボランティア活動を5年間・10年間続けて下さった方々に館長から感謝の言葉とともに賞状が授与されました。5年表彰対象者は10名、10年表彰対象者は6名ですが、表彰式に参加いただいたのは中井稚佳子さん(5年)と石田多香子さん・児玉 諭さん・新妻美紀さん(10年)の4名でした。この4名の方々から、ご自身のボランティア活動へ思いや活動を支えて下さった家族や仲間、教職員への感謝が述べられました。

全体の活動報告を湯浅万紀子教授が行い、研究部については小林快次准教授が「むかわ竜の研究の現状」について報告されました。資料部については、秋元信一郎長による全体報告に続き、春木雅寛研究員による「テフラと樹林形成」、田中嘉寛研究員による「化石ボランティアでクリーニングしているクジラ化石について」の研究報告が行われました。そして、博物館に関わる学生として、理学院博士後期課程の飯島正也さんが「日本の古代ワニは氷河期を生き延びたのか」について、理学院修士課程の増田彩乃さんが「北海道大学総合博物館における『楽しみ方』調査と共有の実践」について研究報告を行いました。最後に、

ボランティアメンバーから、在田一則ボランティアの会長と、星野愛花里さん・芦澤万里音さん(きたみてガーデングループ)、木村聖子さん(化石グループ)、田中望羽さん(考古グループ)から活動報告が行われました。

本報告会は、多岐にわたる博物館の研究・教育・活動についてその一部ではありますが、約50名の参加者の方々と共有し、互いの活動を理解して刺激を受け、そして、次の年度へと活動展開していく気持ちを新たにする機会になったのではないかと考えます。

湯浅万紀子
(研究部教授／博物館教育学)



多くの参加者が発表を熱心に聞く会場風景

研究紹介

バイオメティクス ―模倣こそが持続可能なイノベーションである―



バイオメティクス市民セミナー：対話篇

バイオメティクスとは生物模倣のこと、「生物に学ぶ」という考え方は古くからあり、レオナルド・ダ・ヴィンチが鳥の飛翔に学んで飛行機械の設計をしたことは有名です。海綿を模倣した洗浄スポンジ、絹糸を真似た合成繊維、植物の種子をヒントにした面状ファスナー、カワセミの嘴に似せた新幹線の形状など、我々の身の回りには多くの生物模倣があります。今世紀になってバイオメティクスに関する論文や特許が増え、国際標準も制定されました。2010年にサンディエゴ動物園は、バイオメティクスの分野が米国において15年後に年間3000億ドルの国内総生産、そして2025年までに160万人の雇用をもたらすという経済予測をしました。最近では、2030年には、アメリカで4250億ドル、世界的には1.6兆ドルのGDPが期待されるという試算もあります。今、世界が、改めてバイオメティクスに注目するのは何故でしょうか。

バイオメティクスの基盤は、言うまでもなく生物の多様性です。生物多様性は、長い時間をかけて様々な環境において生物が生存してきた進化適応の結果です。生物多様性を可能とした生物の生き残り戦略は、炭素、水素、酸素、窒素などのどこにでもある元素を使い、再生可能エネルギーである太陽光を源として、常温・常圧プロセスによるモノづくりであり、産業

革命以来の“人間の技術体系”とは機能発現や生産プロセスの仕組みが異なっています。バイオメティクスは、生物の生き残り戦略に学ぶことで、資源やエネルギー、気候変動等の現代社会が抱える喫緊の問題を解決し、持続可能性のための技術革新のヒントをもたらすものと期待されているのです。

バイオメティクスを持続可能な総合的技術体系として実現するためには、我が国が最も不得意とする異分野連携が不可欠です。それは、生物多様性という膨大な生物学の知見を工学に技術移転するための連携です。生物と工学の異分野連携のためには、ビッグデータである生物多様性から工学者が使える情報を抽出するための“バイオメティクス・インフォマティクス”とも言うべき情報科学が必要です。生



2012年度開催企画展示「ネイチャー・テクノロジーとライフスタイル展」

物学データベースの整備とテキストや画像を対象とした多様な情報検索システムが求められます。

バイオメティクスを現実の社会に適用するために求められるもう一つの異分野連携は、生物多様性と生態系サービスの価値を認識しその保全と持続可能な経済活動を目指す『生態系と生物多様性の経済学』に代表される、“自然の循環と経済社会システムの循環の調和”を求める社会科学分野との文理融合です。バイオメティクスを生態系サービスと捉えることにより、制約された環境の下で持続可能な“モノづくり”と“街づくり”の技術革新をもたらす切り札になり得るのです。

博物館は、自然史のみならず、科学史や芸術、民俗を含む人間活動の歴史に関わる資料を収集・保管、展示することで、それらを広く社会に供する場であるとともに、社会と科学の交流を可能とする最適にして不可欠な“社会装置”であるべきだと考えています。社会と科学が一緒になって問題を解決しようとするトランス・サイエンスという考え方が不可欠なのです。そこで北海道大学総合博物館では、2017年度後期から新たな試みとして、“バイオメティクス市民セミナー：対話篇”をスタートしました。生物学と工学の異分野交流、社会と科学の交流を図ることで、“自然と調和した持続可能な人間活動”を考える場にしたいと考えています。北海道命名150年、1940年代には新たな地質年代「人新世」に突入したとも言われ、3.11から7年を迎えました。近代化がもたらした光と影に思いを馳せながら、改めてバイオメティクスの意義を問い直してみませんか。

下村政嗣
(資料部研究員・千歳科学技術大学教授)



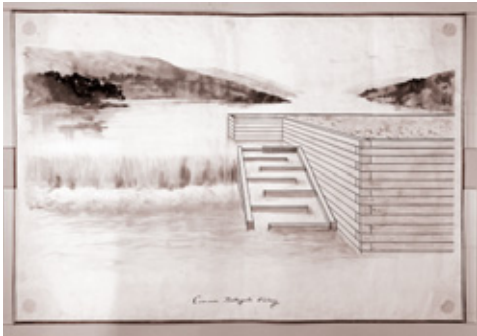
バイオメティクス画像検討会

夏季企画展示

「視ることを通して」

●2018年8月3日～10月28日

放送大学所蔵古写真アルバム
「Sapporo」(部分)



総合博物館所蔵 水産学教授用掛図コレクション
「Common Rectangle Fishway」

総合博物館の夏季企画展示「視ることを通して」を8月3日(金)から10月28日(日)まで開催します。大学の教育・研究活動の中で収集、生成・蓄積されてきた映像・画像等の学術資料を対象とし、北海道大学総合博物館所蔵コレクションと放送大学附属図書館所蔵のコレクションを中心に展開します。

本展では、近代以降の人類の知の営み、特に学術活動の中で、写真などのビジュアル資料が担ってきた機能や切り拓いてきた局面を縦覧し、今では当たり前すぎる存在になったビジュアルメディアの意味を改めて考え直してみたいと思います。同時に、ふだんあまり目にするものがない資料群を通して、学外の方にとって見えにくい大学や研究者の知的営みの歴史の一端をご紹介する機会にしたいと考えています。

展示では、フランスのデイドロ、ダランペールが18世紀に編んだ『百科全書』の「図版集」を展示の出発点に置きます。展示テーマごとに関連する図版ページを配置することで、各テーマの進展や内容的な距離を『百科全書』を基準点に見られるようにします。また種々様々な形態・時期・内容の展示物を俯瞰的に見るために、メディアの種別を縦系、メディアの用いられ方を横系として展示を構成します。

展示物についても少し紹介してみます。放送大学所蔵の古写真アルバムコレクションには、明治期の小樽、函館、札幌のパノラマ写真が含まれたものがあります。自然な色彩が施され



総合博物館所蔵 雪水気象学関係映像コレクション
「The Observation of Fog 1962」(カラー、13:47)

た写真には、札幌農学校の演舞場(現在の時計台)や寄宿舎が、西日を浴びてまだ若い札幌の街のパノラマの中に鮮やかに浮かび上がります。北大コレクションのひとつ、水産学教授用掛図には、魚病や養殖装置、鯉節の作成法などの模式図が描かれます。専門の画工スタッフが作成したこれらの掛図には、研究者による図への修正指示が残るものもあり、実学教育の現場における研究者と技術スタッフとの真摯なやりとりを見ることもできます。他にも、研究者が洋行の際に収集した文献図版等の複写ガラス乾板(庭園学)、観光・教育目的の幻灯機用ランタンスライド、論文制作のために使用されたガラス乾板(古生物学)、研究者の絵日記的なスケッチ、お土産として外国人旅行者に購入されたちりめん本、気象学関係の映像、顕微鏡撮影による映像、人類学素材映像などを展示する予定です。展示の最後には、ビジュアルメディアアーカイブの実際の作業や課題についても紹介します。また、実験映像作家と協働し、資料を用いた映像作品等の制作展開も行うことで、活用されるアーカイブの姿を探求する予定です。会期中には、上映会、講演、トークイベントを計画していますので、ぜひ何度も足を運んでいただきたいと願っています。

山下俊介
(研究部助教／映像資料学)

総合博物館にいざなう灯火
～誘導灯設置プロジェクト～

当館に誘導灯を設置するため、クラウドファンディングを実施します。その意義や実施内容を簡単に記します。

2016年7月、当館は耐震改修工事を経てリニューアルオープンを迎えましたが、間に合わなかったことが2つありました。それはバリアフリー玄関と誘導灯の設置です。バリアフリー玄関はリニューアルオープンから4ヶ月後に無事完成しましたが、誘導灯については電気配線やそれに必要な埋蔵文化財の調査、資金不足など様々な事情から未だに設置できないままとなっています。しかし、このままではせっかく来館してくださった方々を暗い夜道に送り出すことになってしまいます。そこでこの度、来館者の安全性向上を目指すこの取り組みに賛同する学内外様々な人々とともに誘導灯の設置を目指します。誘導灯の設計は、雪が積もる冬でも屋外で利用できることをコンセプトに、本学工学部の学生が担います。その素材には、今年、本学の研究林で伐採されたトドマツを用い、道内企業の協力を得て誘導灯に仕上げていきます。

札幌は道内でも比較的雪が少ない地域ですが、それでも毎年1mを越える積雪に見舞われます(写真)。そのような状況でも誘導灯としての機能を失わないよう、積雪よりも高く、そして丈夫な誘導灯にしなければなりません。世界でも例がないこの取り組みに皆様のお力添えをお願いいたします。

クラウドファンディングの情報が記されたページは下記の通りです。
<https://www.museum.hokudai.ac.jp/topics/13483/>



山本順司
(研究部准教授／地球科学)



積雪時の総合博物館玄関付近の様子

生体展示
「小さな小さなホ乳類
トウキョウトガリネズミ」開催

●2017年12月2日～ 12月24日



左 展示にご協力いただいた皆さん
右 「小さな小さなホ乳類
トウキョウトガリネズミ」展のポスター



トウキョウトガリネズミは、全長約70 mm、体重約2 gの世界最小級の哺乳類。北米のアラスカからノルウェーまで北極圏を含む北方圏に広く生息するチビトガリネズミの亜種で、国内では北海道でしか確認されておらず、絶滅危惧種のためほとんど一般の目に触れることはありません。生体展示「小さな小さなホ乳類トウキョウトガリネズミ」では、生きたトウキョウトガリネズミとオオアシトガリネズミの2種を展示するとともに、今までに解明された生態や進化の一端をパネルやセミナーで紹介し、この貴重な動物の将来の研究と保護への理解を深め

ていただくことを目的としました。総合博物館1階 北極域研究センター展示室を会場として、2017年12月2日(土)から12月24日(日)までの22日間、開催されました。生体の展示でしたので不慮の事故などで会期中途中で展示が終わるのではないかと心配もありましたが、無事終了することができました。関連セミナーは、12月3日(日)に開催され、お二人の講師による「えっ、トガリネズミってネズミじゃないの?」大館智志氏(北海道大学低温科学研究所 助教)と「トウキョウトガリネズミが私たちに語ること」河原 淳氏(環境省 希少野生動植物保

存推進員)の2講演がなされ、約70人の参加者で盛況に終わりました。また、講師による展示解説も行われ、河原氏には12月16日(土)14:00～15:00、大館氏には会期中の平日週2、3回のご対応をいただき、来館者は展示への理解を深められていました。会期中の入館者は8,931名に上りました。講師の先生方、毎日の餌変えに協力いただいた学生をはじめ、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

大原昌宏
(研究部教授／昆虫体系学)

写真パネル展
「シマエナガさんの12ヶ月」

●2018年1月21日～ 3月30日



展示室内の様子

総合博物館では、北海道の生物多様性の理解と保全のために、その自然環境の素晴らしさ、生き物たちの多様さを、写真パネル展とおして紹介したいと考えています。

その1回目の写真パネル展として、国内では北海道にのみ分布する鳥類シマエナガの写真パネル展「シマエナガさんの12ヶ月」を開催いたしました。会期は2018年1月21日(日)から3月30日(金)まででしたが、好評につき、4月15日(日)まで延期されました。

阿寒湖を中心とした道東域で動植物の撮影をされている自然写真家、山本光一さんの協力を得て、この写真展は実現しました。展示会場には、参加型展示コーナーが設けられ、来館者が感想や可愛いシマエナガのイラストを書き込んだ付箋が所狭しに貼られました。来館者のコメントからも、写真展が好評であったことが伺えました。また2月17日(土)には、山本光一氏と大学院理学研究院の高木昌興教授による関連セミナー・スライドトーク「自然写真家と鳥類学者による小型鳥類の魅力」を開催しました。約100名の参加があ

り盛況に終わりました。会期中の来館者数は37,321名でした。写真パネルを提供していただいた自然写真家、山本光一氏、河瀬 幸氏、三浦大輔氏に厚くお礼申し上げます。

大原昌宏
(研究部教授／昆虫体系学)



シマエナガさんが出迎えてくれる企画展示室入口

常設展示
収蔵標本の世界

3階常設展示「収蔵標本の世界」では、総合博物館が所蔵する300万点を超える標本の一部を展示しています。前号に引き続き、展示室毎に取り上げて紹介します。

常設展示
「鉱物・岩石標本の世界」



写真1 入口から見た鉱物エリアの様子

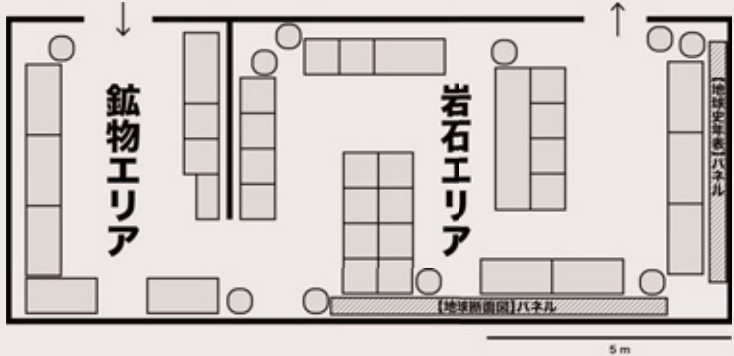


図1 展示室のレイアウト



写真2 鉱物エリアから遠望した岩石エリアの様子

2017年8月4日に設置された、鉱物や岩石標本を紹介する常設展示室「鉱物・岩石標本の世界」を紹介します。鉱物や岩石を扱う地球科学分野は、地球自体を研究対象とする学術分野です。そのため、皆さんを取り巻く空気や磁場、土壌、海など環境と呼ばれる空間そのものを凝縮して紹介することを目標にしました。展示室開設時に収めた標本は鉱物106点、岩石178点、化石9点、科学機器43点、原油や砂漠の砂など22点、総数358点となりました。

展示室は3階アインシュタインドーム前にあり、15.0 m × 6.4 m (96 m²)の大きさを持ちます。展示室は2つの展示エリアに大別され、1つは鉱物エリア(29 m²)、もう一つは岩石エリア(67 m²)となっています(図1)。2つの出入り口を設け、動線上最初の出入り口は鉱物エリアにつながっています(写真1)。鉱物エリアでは、鑑定を切り口に鉱物の定義や特性、多様性をご覧ください。鉱物エリアを動線通りに観覧していくと、行く手に岩石エリアが現れます(写真2)。真正面の展示ケースには見慣れた地表付近を象徴する岩石標本が並びますが、少し視線を上げると、右手壁面に扇型をなす100万分の1スケールの地球断面図が映り、その縁を彩る光に誘われて正面の壁面に視線を移すと、46億年の地球史を4.6 m

のパネルで表現した地球史年表が目に入ります。この2枚のパネルはそれぞれ地球の空間スケールと時間スケールを感じていただくために作成したもので、それぞれが持つ時空間スケールに調和するように岩石や科学機器などを配置しました。

しかし、地球科学で扱う時代や場所は日常生活ではほとんど意識しない領域だと思われます。例えば、100万年前や地下100 kmという言葉を目にしても、それらがどれくらい古い時代なのか、また、どのような場所なのかを認識することは容易ではありません。そこで、地球科学の時空間スケールを認知しやすくするよう、芸術分野でよく使われるAnalogy法を取り入れることにしました。

Analogy法は類推的拡張と訳されることもあるように、なじみのあるスケールから徐々に拡大または縮小することで、対象物の大きさを認知しやすくする手法です。地球断面図に取り付けた仕掛けは富士山のジオラマです(写真3)。100万分の1スケールのパネル上に設置した場合、その高さは約3.8 mmになります。地球内部の様々な場所の深さについて、その絶対値を評価することは困難かもしれませんが、この富士山と見比べることで、地球だけでなく、環境という言葉で呼んでいる空間の大き

さを感覚的にとらえていただくことを狙いました。一方、地球史年表については年表自体がAnalogy的な表現になっているため、それ以上の措置は施しませんでした。例えば、人類の時代として再定義された第四紀が始まった約260万年前は、この年表では現在(左端)からわずか2.6 mmに位置します。この人類史(2.6 mm)を基準に地球史(4600 mm)を見晴らしつつ、環境という言葉で呼んでいるモノの持続可能性やそれを支えている地球内外の要素について想いをはせていただくことができればと願っています。

山本順司
(研究部准教授／地球科学)



写真3 富士山のジオラマ

卒論ポスター発表会

●2018年3月3日・4日

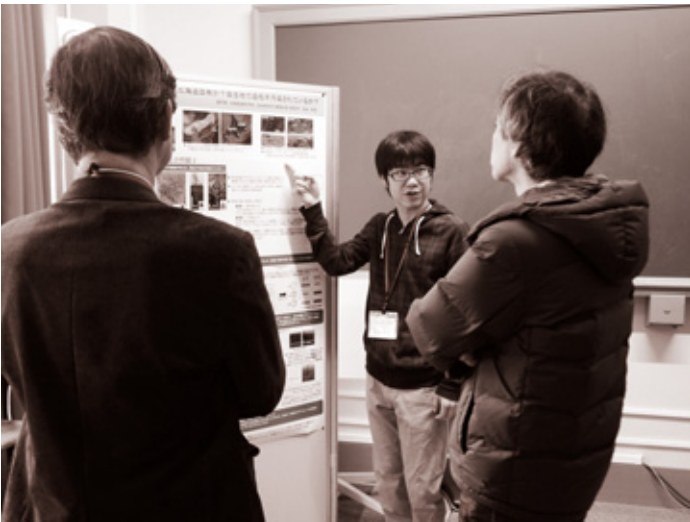
北海道大学の学部4年生が卒業研究を1枚のポスターにまとめ、来場者にわかりやすく発表して質問に受け答える「卒論ポスター発表会」を、3月上旬の週末2日間に館内の「知の交差点」エリアで開催しました。今年度で10回目となるこの取り組みは、北大の全人教育の一環として展開しているミュージアムマイスター認定コースの社会体験型科目に位置づけており、コミュニケーション能力の涵養や異分野への関心の喚起、大学博物館への理解を深めることを目的としています。

発表には下記のように農学部3名、工学部3名、文学部1名、水産学部1名の計8名が参加しました。1枚のポスターを完成させるまでに、中間発表会に参加して、当館の担当教職員の指導を受け、他の発表者や発表会を運営する学生とのディスカッションを重ね、そこで得た意見を参考にして改訂を行いました。さらにさまざまな来場者を想定し、それぞれに応じた説明のリハーサルを重ねて準備しました。発表会当日は、緊張しながらも来場者との対話を楽しみながら説明していました。発表会の運営は4名の学部生が担当し、発表者のメッセージなどを掲載したプログラムを制作した他、発表会当日には司会や受付を務め、会をスムーズに運営しました。

発表会の最後には、2日間の来館者の投票による「来館者賞」、市民5名と本学教員5名から成る審査員の評価による「最優秀賞」「優秀コミュニケーション賞」「優秀デザイン賞」を決定し、表彰式と講評会を行いました。「最



会場風景「知の交差点」



来場者に説明する4年生

優秀賞」と「優秀デザイン賞」は農学部の塩谷さんが、「優秀コミュニケーション賞」は農学部の清水さんが、「来館者賞」は水産学部の雲中さんが受賞しました。そして、今年度から新設されたミュージアムマイスターが選定する「ミュージアムマイスター賞」は、農学部の杉浦さんが受賞しました。

来場者には、さまざまな学部の4年生の研究成果を知っていただく機会となりました。発表者と運営担当学生の事後考察レポートには、コミュニケーション能力を身に付ける機会になっただけでなく、卒業研究を見直したり、他分野の学生の研究を知ったり、来場者から有意義なご意見をいただく貴重な機会となったことや、発表会を運営した意義や課題などが綴られています。準備のプロセスや当日の様子、参加した学生の事後考察レポートは当館ホームページで公開しています。

<https://www.museum.hokudai.ac.jp/education/museummeister/cat/project/poster/>

●発表者

大沼 音也（工学部 環境社会工学科）
「北海道大学札幌キャンパス敷地境界の形成過程と特徴」

杉浦 滯（農学部 森林科学科）
「台風による森林攪乱後の処理方法によって森林はどのように再生するか～人の影響、シカの影響に注目して～」

雲中 慧（水産学部 海洋資源科学科）
「博物館における「交流」機能の検討―豊海おさかなミュージアムを例にして―」

水丸 和樹（工学部 情報エレクトロニクス学科）
「ロボットの集団が人に与える影響の調査―ロボットと共生する未来にむけて―」

清水 祐希（農学部 生物機能化学科）
「トウモロコシペプチドから糖尿病薬を作れたら…」

春名 恭太郎（文学部 人文科学科）
「戦後北海道開発体制の成立」

塩谷 悠希（農学部 生物資源科学科）
「絶滅危惧植物ヤチカンバは北海道固有か？自生地で遺伝子汚染されているか？」

金子 瑤（工学部 環境社会工学科）
「建築家・下村憲一ってどんな人？」

●運営担当学生

上川 伶（理学部）・杉谷 紬（文学部）・
三和 優吾（農学部）・森本 智郎（理学部）

湯浅万紀子
（研究部教授／博物館教育学）

2016年度
学生企画ミュージアムグッズ(2)
「デスモスチルスUSB」



特典データが内蔵された「デスモスチルスUSB」



開発した北大大学院生

2016年度の北海道大学大学院の授業「博物館コミュニケーション特論 ミュージアムグッズの開発と評価」の受講生4名が、総合博物館オリジナルのグッズ「デスモスチルスUSB」（4 GB）を開発しました。授業において、マーケティング調査をもとに検討を重ね、総合博物館に展示されているデスモスチルスをモチーフにしたUSBが完成しました。デスモスチルスとその研究に関心を深めていただきたい、そして日常に使用していただける博物館のオリジナルグッズを開発したいとの学生の思いから、実現しました。

USBの木目の筐体にはデスモスチルスがデザインされています。また、本体には数々の特典データが内蔵されています。本学の卒業生で大阪市立自然史博物館の学芸員であり、沼田町化石館と総合博物館の研究員を務める田中嘉寛さんが展示室でデスモスチルスについて解説する動画、デスモスチルスの発掘から調査・研究そして展示に関する解説テキストや写真、デスモスチルスの壁紙です。デザインと解説の監修は田中さん、映像制作は高等教育推進機構の藤田良治准教授が担当し、動画には田中さんとともに学生が出演しています。新設された「ミュージアムショップ ぼとろ」で販

博物館学特別講義Ⅰ：
学術標本・資料学
～地球惑星科学編～



収蔵閲覧室で行われた講義の様子

売しています。ぜひお手にとってご覧下さい。

グッズ開発の経緯を伝える授業の様子は、総合博物館のウェブサイトで紹介しています。
<https://www.museum.hokudai.ac.jp/education/museummeister/cat/lesson/communication3/>

担当学生：江間章斗（情報科学研究科）、亀井大輝（農学院）、佐藤駿哉・牧口謙（理学院）
監 修：田中嘉寛（大阪市立自然史博物館）
映像制作：藤田良治（高等教育推進機構）
協 力：小林快次・山下俊介（総合博物館）
指導教員：湯浅万紀子（総合博物館）

湯浅万紀子
（研究部教授／博物館教育学）



研究者の解説を聞く担当学生（USB内蔵の特典データより）

この授業は、標本や資料に対するとらえ方を様々な学術分野ごとに学び、標本・資料の実体を感じ取ることを目標としています。標本や資料の意味や取り扱い方は分野によって大きく異なります。例えば、標本・資料の採取・収集法、保管法、利・活用の技法、データ整理・公開法などを分野ごとに学べば、その共通点や相違点から学術標本に通底する意義が浮かび上がってくるでしょう。

この写真は研究用岩石標本を紹介している様子です。岩石標本の場合、そこから化学組成や生成年代を精確に抽出することを主眼に

ミュージアムマイスター認定式

●2018年4月25日



左から徳丸さん、森本さん、中川館長、杉谷さん

総合博物館が2009年度から展開しているミュージアムマイスター認定コースは、全人教育の一環として、課題探究能力、コミュニケーション能力、マネジメント能力などを身につけた学生を育てるための教育システムです。博物館やフィールドワークなどに関連する所定の科目・プロジェクトを受講し、一定基準の成績を修め、プレゼンテーションを含む最終面談をクリアした学生をミュージアムマイスターとして認定しています。2017年度後期には、文学部3年の杉谷紬さん、理学院修士課程1年の徳丸沙耶夏さん、理学部3年の森本智郎さんの3名が認定され、認定者は33名となりました。

4月25日に認定式が行われ、中川光弘館長から認定証が授与されました。杉谷さんと徳丸さんは「博物館を取り巻く様々な人々と博物館を繋ぐ架け橋になりたい」と決意を新たにしました。また、高校時代にマイスターコースを知り、入学当初からマイスターを目指していた森本さんは、「専門の細胞生物学を博物館でどのように展開できるのか、コースで学んだことを活かして考えてゆきたい」とコメントしました。

高橋一葉
（研究支援推進員）

しているため、観察や保管よりも破壊分析への適応度を重視して採取する場合があります。そのため授業では、どのような目的で研究を行っているのかを詳しく解説するとともに必要な分析法や採取に用いる道具を中心に紹介します。また、収蔵閲覧室や標本を加工する石工室、分析室などを見学することで、地球惑星科学分野における標本の意味が体感できるプログラムになっています。

山本順司
（研究部准教授／地球科学）

公開シンポジウム

「絶滅動物化石の最新研究 in 2018」開催

●2018年3月18日

3月18日(日) 2年ごとをめぐりに行われているこのシンポジウムは、今年で4回目を迎え、定員60名に対して100名以上の来場者にお越しいただきました。講演者は本学小林快次准教授および小林研究室の卒業生2名と院生・学生9名、むかわ町立穂別博物館の西村智弘学芸員も参加し、総勢13名が最新の研究について語りました。



恐竜の卵の大きさについて講演する田中康平さん

「地質のはなし」「爬虫類のはなし」「恐竜のはなし」「鳥類のはなし」「哺乳類のはなし」と豊富なトピックスをそろえ、それぞれの視点で一般の方々にもわかりやすく講演が行われました。「地質」では、西村智弘さんにより、むかわ竜が発見された函淵層の層序の研究成果のはなしがなされ、「爬虫類」では今年博士号を取得した飯島正也さんが氷河期前後の日本ワニ類の絶滅と回復のシナリオを報告しました。「恐竜のはなし」では、足跡(中島重大)・病理(太田晶)・スピード(久保孝太)・タンパク質(田中望羽)・巨大恐竜(吉田純輝)・内臓(高崎竜司)・卵(田中康平)・絶滅直前の恐竜(小林快次)について講演しました。特に、名古屋大学博物館の田中康平さんによる恐竜の卵の大きさの講演は好評でした。「鳥類」は、田中公教さんが北海道で発見された海へ進出した最古の恐竜「チュプカオルニス」とその仲間の紹介、「哺乳類」では、大阪市立自然



シンポジウムのポスター

史博物館田中嘉寛さんが北海道で見つかるヒゲクジラ類についてわかりやすく話をしました。次回は2020年を予定しています。

田中望羽
(理学院修士2年)

「札幌農学校第2農場を活用した北海道遺産発信プロジェクト」の実施



ガイドツアーで配布されたトートバッグ

「札幌農学校第2農場を活用した北海道遺産発信プロジェクト」をほっかいどう遺産WAONの助成を受けて実施しました。札幌農学校第2農場は北海道遺産に認定されている国の重要文化財で、来場されるみなさまに札幌農学校創設期の雰囲気を楽しんでいただいています。本プロジェクトではさらなる周知を

めざして、総合博物館の来館者に第2農場まで足を伸ばしていただくこと、札幌駅から比較的近い位置にある北海道遺産の一つとして北海道遺産自体を来場者に周知することを計画しました。札幌農学校第2農場の新たな魅力を伝えるためにアーティストと協働した2つのプロジェクトをご紹介します。

一つ目は第2農場お散歩マップの作成で、本学水産学部OBであるアーティストの本田征爾さんにお散歩マップの原画を描いていただきました。総合博物館から第2農場までは歩いて十数分ですが、イチョウ並木、中谷宇吉郎博士の雪の結晶の記念碑や大野池など、多くの寄り道スポットがあります。これまでに北大で発行された地図も参考にしながら、何度も歩いて、モチーフを選びました。マップに盛り込みたい見どころはたくさんありますが、情報が多すぎると全体としては平板な印象になってしまいます。マップには近隣の北海道遺産である苗穂の工場群も描いていただいています。館内で配布しているマップを片手にぜひ軽やかに足を伸ばしていただきたいと思います。



札幌農学校第2農場お散歩マップ

札幌農学校第2農場ガイドツアー

●2017年10月28日～ 10月30日・11月1日～ 11月3日



ツアーの様子

第2農場のガイド付きツアーを2017年10月28日(土)～10月30日(月)および11月1日(水)～11月3日(金)の6日間、午前と午後の1日2回実施いたしました。天気にも恵まれて、参加者は総計で298名に達しました。世代では50～69歳が最も多く、また道内の方が43%、海外の方が5名おられました。さらに参加は2度目、3度目という方が計47名おられました。

近藤はこの期間に国際会議が重なり参加できませんでしたが、ボランティアの石田さん、稲場さん、宇井さん、大山さん、城下さん、寺西さん、渡部さんのご活躍により無事終了いたしました。実施後のアンケートでは全体に非常に好評で、こうした「社会開放講座的な」イベントは是非続けてほしい、また参加したい、などの意見がありました。画像や動画を取り入れては、という意見もあり、今後の課題となりました。当日配られたオリジナルトートバックの評判も上々でした。

近藤誠司
(資料部研究員)

山下俊介
(研究部助教／映像資料学)

ポプラチェンバロ・カフェタイム・コンサート

●2017年12月10日



ポプラチェンバロを演奏する高橋さん

宇宙の4Dシアター

●2017年11月25日・2018年1月20日・4月7日



1月公演「銀河の車窓から」
カンパネルラ役の石神さん、
企画の牧野さん、ジョバンニ
役の佐野さん(左から)

体験型展示プログラム「宇宙の4Dシアター」公演を11月、1月、4月に開催しました。「とびだす! 星座」と題した11月公演は、4Dボランティアである徳丸沙耶夏さんをナビゲータ(解説)、牧野琴美さんをパイロット(機器操作)で開催しました。動物の毛皮を実際に触れていただいた後で、その動物の星座について



11月公演「とびだす! 星座」の毛皮

解説するという、博物館らしいプログラムに参加者のみなさんに楽しんでいただけました。1月公演「銀河の車窓から～一日限りの再出発～」では、『銀河鉄道の夜』をモチーフに牧野琴美さんが脚本を作成し、ジョバンニとカンパネルラの掛け合いで星空を旅するプログラムを実施しました。雰囲気づくりのために、プログラムに合わせて乗車券風の整理券を作成し、来場された参加者からは驚きの声があがりました。4月公演「火星を狙い撃て!～今年は火星の大接近～」では、約二年二カ月ごとに地球に最接近する火星をテーマに、4Dボランティアの福澄孝博さんがナビゲータの博士役、ナビゲーションサポートの助手役を佐藤伽奈さん、パイロットは石神早希さんが務められました。実際に投影画面を操作するのはパイロットですが、助手役の操作のように見えるような演出の工夫が施されました。なお、2017年度はミュージアマイスタープログラムの学生参加プロジェクト受講生も4Dシアター運営に参加し、博物館でのボランティア活動の理解とイベント運営の実践を積むことができました。

山下俊介
(研究部助教／映像資料学)

2017年はテレマン没後250年のメモリアルイヤー。テレマンの作品で始まり、酉年に因みラモーの「雌鶏」、カフェタイムコンサートのタイトルに合わせ、ヴィオールのための作品マレの「カフェ」の他、多彩なプログラムの後、テレマンの作品で終了しました。席が全て埋まるほどの大盛況で、皆様にも楽しんで頂けた一時的だったかと思います。

大原昌宏
(研究部教授／昆虫体系学)

北大ミュージアムクラブMouseionによる展示解説

●2018年3月3日



トリカヘチャタテについての展示解説

北大ミュージアムクラブMouseionは総合博物館を中心に活動する北海道大学の学生グループです。3月には、総合博物館で開催された卒論ポスター発表会に合わせて展示解説を行いました。文学部3年(当時)の伊藤優衣さんは「北大昆虫研究の歴史と今」、私

は「〇〇逆転昆虫「トリカヘチャタテ」というテーマです。この日は私にとって展示解説デビューの日でした。展示担当の先生の監修を受けて原稿を作成し、スケッチブックを用いて解説を完成させました。少し不安でしたが、事前に先輩方からアドバイスをいただいたり、ピ

デオカメラを用いて解説の様子をチェックする練習を行ったため、自信を持って解説できたように思います。

私が展示解説に取り組んだのは、研究について知った時の面白い、という感覚を来館者の方にも味わっていただきたいからでした。そのため、来館者の方が興味津々といった様子で解説を聞いて下さった際にはとても嬉しく思いました。

また、解説後、来館者の方から解説内容への疑問や意見をいただきました。これは私にとってとても良い刺激であり、私自身が興味を広げるきっかけとなりました。実は、展示解説とはただ展示の説明をするというイメージをもっていました。しかし、実際には人と人との関わりの要素が多く、予想以上に難しい取り組みでしたが、解説を通して得るものはそのぶんとても大きいと感じました。わかりやすいだけではなく、他者に刺激を与えることのできる展示解説を目指し、今後も活動が続けていきたいと思っています。

岡田真歩
(理学部2年)

来館者調査実施報告



左 総合博物館玄関付近で調査を実施
右 4カ国語に対応した調査票

当館は耐震改修工事のため、1年4ヶ月に及ぶ休館を経て2016年7月26日にリニューアルオープンを迎えました。その後の数ヶ月間はメディアに取り上げていただいたり、記念イベントを行ったりしていたため、特別な広報活動を展開していたことになりますが、それから1年以上が経ち、リニューアルで変化した当館の真価を評価できる時期が到来しました。

2016年のリニューアルでは、高校生をターゲットにした“365日オープンキャンパス”をはじめ、休憩スペースやカフェを核とした“知の交差点プロジェクト”、ハンズオン展示室の新

設、動態展示の開始、完全バリアフリー化など様々な取り組みを試みました。それらがどういった効果をもたらしているのかを知ること、は、今後の展示や事業展開の方向性を検討する上で不可欠です。そこで2018年2月1日～2月28日にかけて、来館者の年代やお住まい、来館目的などを探る来館者調査を実施しました。

誌面の都合上、詳しい解析結果を記すことはできませんが、外国の方が3割以上来館されていることが判明しました。また、旧正月を含む期間であったことが影響していると思われま

すが、中国の方が全外国人の7割程度(全来館者の2割程度)を占めていることが目立ちました。当館観覧による“北海道大学に対するイメージの変化”については、「良くなった」との回答が80%以上あり、当館が本学の広報拠点として機能していることを確認することができました。調査にご協力いただいた皆様、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

山本順司
(研究部准教授／地球科学)

平成29年度
後期記録

平成29年10月から平成30年3月までに
行われたセミナー・シンポジウム

バイオメティクス市民セミナー
「“長へい生き物”の話」
柁原 宏(北海道大学大学院理学研究院 准教授)
黒田 茂(北海道大学電子科学研究所 助教)
日時:10月7日(土) 13:30～15:30
参加者:52名

北大総合博物館主催土曜市民セミナー
道民カレッジ連携講座
「食べる。笑う。眠る!!」
吉野 正則(北海道大学フード&メディカルイノベーション推進本部 客員教授)
日時:10月14日(土) 13:30～15:00
参加者:72名

第5回ミュージアム・カフェ 金曜ナイトセミナー
＜イグ・ノーベル賞受賞記念講演＞
「性器の逆転した昆虫、トリカヘチャタテ」
吉澤 和徳(北海道大学大学院農学研究院 准教授)
日時:10月20日(金) 18:30～19:30
参加者:150名

バイオメティクス市民セミナー
「サメとアザラシ、生態と動態」
小林 万里(東京農業大学生物産業学部)
宮崎 真理子(株式会社日立製作所)
日時:11月4日(土) 13:30～15:30
参加者:72名

北大総合博物館主催土曜市民セミナー
道民カレッジ連携講座
「巨大津波に備える」
谷岡 勇市郎(北海道大学大学院理学研究院附属地震火山研究観測センター 教授)
日時:11月11日(土) 13:30～15:00
参加者:72名

バイオメティクス市民セミナー
「黒が大事! イカスミと鳥の構造色」
松浦 俊彦(北海道教育大学函館校 教授)
桑折 道済(千葉大学工学研究院 准教授)
日時:12月2日(土) 13:30～15:30
参加者:68名

生体展示「小さな小さなホ乳類
トウキョウトガリネズミ」関連セミナー
「えっ、トガリネズミってネズミじゃないの?」
大館 智志(北海道大学低温科学研究所 助教)
「トウキョウトガリネズミが私たちに語ること」
河原 淳(環境省 希少野生動植物保存推進員)
日時:12月3日(日) 13:30～
参加者:70名

北大総合博物館主催土曜市民セミナー
道民カレッジ連携講座
「口琴から広がる
シベリア・サハの音世界」
荏原 小百合
(北海道科学大学高等教育支援センター 准教授)
日時:12月9日(土) 13:30～15:00
参加者:60名

バイオメティクス市民セミナー
「形は機能?植物プランクトンと無生物の形」
堀口 健雄(北海道大学大学院理学研究院 教授)
三友 秀之(北海道大学電子科学研究所 准教授)
日時:1月6日(土) 13:30～15:30
参加者:76名

北大総合博物館主催土曜市民セミナー
道民カレッジ連携講座
「円山原始林の成り立ちと推移」
春木 雅寛(北海道大学総合博物館 資料部研究員)
日時:1月20日(土) 13:30～15:00
参加者:130名

バイオメティクス市民セミナー
「働かないアリと枯菌生活」
長谷川 英祐
(北海道大学大学院農学研究院 准教授)
高木 清二(公立ほこだて未来大学 准教授)
日時:2月3日(土) 13:30～15:30
参加者:85名

北大総合博物館主催土曜市民セミナー
道民カレッジ連携講座
「北海道の稲作と
伊藤誠哉教授のいもち病研究
～無声の記録映画を解読する愉しみ～」
杉山 滋郎(北海道大学総合博物館 資料部研究員)
日時:2月10日(土) 13:30～15:00
参加者:68名

写真パネル展「シマエナガさんの12ヶ月」
関連セミナー・スライドトーク
「自然写真家と鳥類学者による
小型鳥類の魅力」
高木 昌興(北海道大学大学院理学研究院 教授)
山本 光一(自然写真家)
日時:2月17日(土) 13:30～15:00
参加者:100名

バイオメティクス市民セミナー
「鳥と魚、したたかな求愛」
相馬 雅代(北海道大学大学院理学研究院 准教授)
山家 秀信(東京農業大学生物産業学部)
日時:3月3日(土) 13:30～15:30
参加者:72名

北大総合博物館主催土曜市民セミナー
道民カレッジ連携講座
「法学・政治学と社会
―生殖補助医療と親子関係から―」
櫛橋 明香
(北海道大学大学院法学研究科 准教授)
日時:3月10日(土) 13:30～15:00
参加者:58名

北海道大学総合博物館シンポジウム
「絶滅動物化石の最新研究 in 2018」
西村 智弘(むかわ町立穂別博物館)
飯島 正也(北海道大学大学院理学院博士課程)
中島 重大(北海道大学大学院理学院修士課程)
太田 晶(北海道大学大学院理学院修士課程)
久保 孝太(北海道大学大学院理学院修士課程)
田中 望羽(北海道大学大学院理学院修士課程)
吉田 純輝(北海道大学大学院理学院博士課程)
高崎 竜司(北海道大学大学院理学院博士課程)
田中 康平(名古屋大学博物館)
Chinzorig Tsogtbaatar(モンゴル科学アカデミー)
小林 快次(北海道大学総合博物館 准教授)
田中 公教(北海道大学大学院理学院博士課程)
田中 嘉寛(大阪市立自然史博物館)
日時:3月18日(日) 13:00～18:00
参加者:85名

平成29年10月から平成30年3月までに
行われたバラタクソノミスト養成講座

野外採集・地質見学会
松枝 大治(北海道大学総合博物館 資料部研究員)
日時:10月7日(土)～10月8日(日)
定員:20名
対象:中学生以上(参加者31名)

鉱石バラタクソノミスト養成講座(初級)
松枝 大治(北海道大学総合博物館 資料部研究員)
日時:12月16日(土)～17(日) 定員:10名
対象:中学生以上(参加者32名)

昆虫甲虫バラタクソノミスト養成講座(中級)
大原 昌宏(北海道大学総合博物館 教授)
日時:1月27日(土)～28(日) 定員:12名
対象:小学4年生以上(参加者12名)

写真パネル展「シマエナガさんの
12ヶ月」開催(～4/15)
2月16日 文部科学省 高等教育局 学生・留
学生課(1名) 解説
3月14日 タルトゥ大学職員一行(3名) 解説
3月20日 文部科学省大臣官房会計課係長
他一行(8名) 解説
3月31日 研究支援推進員 西本結美さん
退職

入館者数(平成29年10月～平成30年3月)

	入館者数	見学 団体数	解説の 件数	企画展示(略称)
10月	25,375	34	11	惑星地球の時空間(～10/1)
11月	13,419	12	5	
12月	9,792	6	1	生体展示「小さな小さなホ乳類 トウキョウトガリネズミ」 (12/2～24)
1月	9,150	8	2	写真パネル展「シマエナガさんの12ヶ月」(1/21～)
2月	11,784	8	3	写真パネル展「シマエナガさんの12ヶ月」
3月	14,617	6	3	写真パネル展「シマエナガさんの12ヶ月」

お礼

以下の方々に当館ボランティアとして学術標本整理作製・展示準備等でご協力いただきました。謹んでお礼申し上げます。

(平成29年10月1日～平成30年3月31日)

(敬称略)

●植物標本

石田愛子, 蝦名順子, 大原和広, 加藤康子, 桂田泰恵, 加藤典明, 金上由紀, 児玉 諭, 駒谷久子, 嶋崎太郎, 須田 節, 高岡さくら, 高清水昭子, 高橋美智子, 田端邦子, 中川博之, 藤田 玲, 船迫吉江, 星野フサ, 細川音治, 本多丘人, 目黒嘉子, 吉中弘介, 與那覇モト子, 和久井彬実

●菌類標本

石田多香子, 齋藤美智子, 鈴木順子, 谷岡みどり, 外山知子, 星野フサ, 村上さつき

●昆虫標本

青山慎一, 伊藤優衣, 梅田邦子, 川田光政, 喜多尾利枝子, 久万田敏夫, 黒田 哲, 斉藤光信, 櫻井正俊, 佐藤國男, 佐藤拓海, 佐藤諒一, 志津木眞理子, 須長直美, 諏訪正明, 高橋誠一, 高柳達志, 問田高宏, トン シン, 中西茂弘, 永山 修, 伴 光哲, 古田未央, 細川真里栄, 松本千春, 松本脩三, 村上麻季, 村田真樹子, 山本ひとみ, 芳田琢磨, 吉野優希, 渡邊雅樹

●考古学

安 翔宇, 荒谷 博, 石黒佑紀, 石場ゆり, 稲田 薫, 井宮淳恵, 岩波 連, 江口暁彦, 遠藤 優, 翁 哲毅, 太田 晶, 大泰司紀之, 奥山杏南, 神田いずみ, 木内和秀, 木村則子, 齋藤 匠, 斉藤理恵子, 榊山匠, 佐々木征一, 佐藤美恵, 下川千尋, 謝 倩氷, 末永義圓, 鈴木 花, 隅田悠花, 田中公教, 田中望羽, ツォグトバーター チンゾリグ, 中村晴歌, 成田千恵子, 西本結美, 二瓶寿信, 林 和花奈, 東田有希, 平尾嵩志, 水澤こと, 村上凌太, 森本智郎, 渡辺双葉

●メディア

飯島正也, 伊藤優衣, 織田さやか, 卓 彦伶, 武田満希, 辻絵里香, 藤井真知子, 三嶋 渉, 山本ひとみ

●化石

朝見寿恵, 荒山和子, 安 翔宇, 飯島正也, 池上森, 石崎幹男, 池田雅志, 市橋晃弥, 今井久益, 白田みゆき, 太田 晶, 小笠原玄記, 岡野忠雄, 尾崎美雪, 尾上洋子, 金内寿美, 川又いづみ, 木村聖子, 木村映陽, 木村衛朋, 國廣亜矢子, 久保孝太, 近藤知子, 近藤弘子, 齊藤優里, 酒井光希, 酒井実, 榊山 匠, 佐藤美恵, 高崎竜司, 高田健太郎, 田中公教, 田中望羽, 谷口 諒, 千葉謙太郎, ツォグトバーター チンゾリグ, 寺田美矢子, 寺西育代, 寺西辰郎, 時永万音, 長瀬のぞみ, 長野あかね, 中谷内 奎, 八丁目清之, 八丁目文枝, 福田祐生, 本田由起, 前田大智, 三嶋一輝, 森 淑子, 守屋友一朗, 山下暁子

●北大の歴史展示

寺西辰郎

●展示解説

在田一則, 飯島正也, 石黒弘子, ヴァース ラシェール, 太田 晶, 生越昭裕, 河本恵子, 菅 妙子, 堺 俊樹, 笹谷幸恵, 高崎竜司, 田中公教, 田中望羽, 千葉謙太郎, 塚田則生, 手島 駿, 寺西辰郎, トン シン, 成田敦史, 西川笙子, 沼崎麻子, 濱市宗一, 濱崎瑠菜, 増田彩乃, 松田義章, 村上龍子, 森 淑子, 山崎敏晴, ロバート・クルツ

●翻訳

ロバート・クルツ

●平成遠友夜学校

遠藤大輔, 大山圭也, 柿本恵美, 上川 伶, 城下治子, 田中敏夫, 中井玉仙, 沼田勇美, 牧野小枝子, 増田文子, 松田大徳, 山岸博子

●4Dシアター

石神早希, 清谷優理香, 後藤凌平, 佐藤伽奈, 関上 遼, 田中裕子, 塚田則生, 辻絵里香, 徳丸沙耶夏, 沼田勇美, 平田栄夫, 福澄孝博, 牧野小枝子

●ポプラチェンバロ

浅川広子, 石川恵子, 小野敏史, 新林俊哉, 高橋美悠, 新妻美紀, 野村さおり, 松田祥子, 雪田理菜子, 横倉伶奈

●図書

岡西滋子, 今野成捷, 須藤和子, 高木和恵, 田端邦子, 中井稚佳子, 沼田勇美, 久末進一, 鮎田久意, 星野フサ, 本名百合子, 宮本昌子, 村上龍子, 山岸博子

●第二農場

石田多香子, 稲場良雄, 宇井康子, 大山圭也, 甲本勝嗣, 城下治子, 高井宗宏, 寺西辰郎, 渡部典子

●ハンズオン

加藤典明, 久保直紀, 佐藤蓮花, 嶋野月江, 下川千尋, 須藤和子, 徳丸沙耶夏, 仲谷優輝, 沼崎麻子, 濱崎瑠菜, 福澄孝博, 増田彩乃, 山岸博子

●展示改訂(地学)

在田一則, 植松淳子, 大槻淳子, 佐藤健一, 佐藤豪, 清水光希, 鈴木 花, 塚田則生, 寺西辰郎, 松田義章, 三嶋 渉, 横倉伶奈

●きたみてガーデン

芦澤万里音, 阿部 悠, 伊藤響子, 玉田聖司, 星野愛花里

●水産科学館

亢 世華, 木村克也, 川原田峻平, 外山太一郎, 寺塚真奈美, 岸本早貴, 高橋雄大, 一戸友晴, 神山晃汰, 杉山明日香, 土屋さくら, 能登雄大, 千田哲朗, 長谷川稜太, 木村亮太

【表紙写真】 授賞式後の記念撮影(左から藤田正一名誉教授, 名和豊春総長, 小林快次准教授, 中川光弘総合博物館長)